

特別講演 1

「パーキンソン病の最新の薬剤使用のストラテジー」

名古屋大学 神経内科准教授

平山 正明 先生

1817年にジェームズパーキンソンによって、パーキンソン病の記載がなされた。しかし、その効果的な治療法は、1960年のL-dopaの臨床使用を待たなければならなかった。L-dopaの臨床効果は画期的であり現在でもパーキンソン病治療のゴールドスタンダードである。しかし病期の進行による薬効の減弱、薬剤による運動合併症（ジスキネジアなど）、さらに近年では認知や自律神経症状など非運動症状の問題が大きくなっている。その問題を解決するために、ドパミンアゴニスト、L-dopaの分解阻害剤、抗てんかん薬からの新しい薬効、さらに貼付剤、注射剤などの投与経路の改善など数多くの薬剤が販売されている。パーキンソン病の治療薬は他の神経変性疾患に比べ多くの治療薬があるため、治療の仕方も難しく習熟した神経内科であっても、選択肢に迷うことが多い。日本神経学会でも治療の標準化のため、パーキンソン病治療ガイドラインが作成されている。その中でドパミンアゴニストを初期投与の選択肢としてあげているが、この作成の基準となったのはジスキネジアの出現抑制でありドパミンアゴニストの副作用の面への考慮が少ないのではないかとする批判も出ている。パーキンソン病患者の症状は多種多様であることから非運動症状を含めた治療対応が必要と考えられる。本講演では、運動症状だけでなく非運動症状の重要性とその対処法を含めて概説したい。